

# NIPPON FOOD SHIFT

## 「おいしい」の、その前に。

これからの「食」を  
どう考え、何をすべきか？

### 消費者 × 農林水産省

おいしいものが当たり前のように手に入り、豊かな食を享受できる今の日本。その当たり前は、今後もずっと続いていくのでしょうか。気候変動、世界情勢の変化など地球規模のものから、少子高齢化など国内問題まで、日本の「食」の裏側には解決すべき様々な課題があります。これからの「食」はどうか、そのために何をすべきか。「食料・農業・農村基本法」の見直しに向けた議論の環として、3日連続この紙面上で消費者、事業者、生産者の方々と農林水産省の若手職員有志による「チーム2050」の座談会を展開します。思いや意見を交わしながら、20年後、30年後の日本の「食」を考え、あるべき姿を追求します。

### 食を選ぶ基準は二極化しているのか

**加藤** みなさんが食を選ぶ基準はどういうものですか。やはり安いか高いかなのか。あえて生産者の顔が見えるものとか、無農薬や有機農法で作られたものを選んでいたりするのでしょうか。

**河瀬** 私はSNSや口コミで生産者自身が発信し背景を知った上で応援したい気持ちがある。JAS日本農林規格マークや、適切な飼育環境で育てられた肉や卵などエムルウェルフェア（動物福祉）も気にかけます。

**ダイちゃん** コンサートには5000円払うのに、キャベツ1個に3000円は払いたくない人がいるのは事実。しかし、その3000円のキャベツがおいしいことが伝われば買ってみたいと思うようになるかもしれない。そのきっかけづくりが大切ですね。

**加藤** 安ければいいの、たまたま安くても安心しておいしものを選択するの、消費者の意識は二極化が進んでいるのでしょうか。

**笠原** 価格を抑えて大量に安定的に生産・供給することは決して悪いことではないはず。一方で、生産者



タレント 加藤 浩次氏

農家は米や野菜を作るアーティストです。であれば作品づくりに専念させてあげたいという考え方もあります。画家の描いた絵を画廊が販売するのと同じように、現在の一般的で安定的な流通網以外に、ブランドものだけを供給するような流通ラインを別に作るという考え方もいいんじゃないかな。



フードコーディネーター 河瀬 璃菜氏

農家は米や野菜を作るアーティストです。であれば作品づくりに専念させてあげたいという考え方もあります。画家の描いた絵を画廊が販売するのと同じように、現在の一般的で安定的な流通網以外に、ブランドものだけを供給するよう



農林水産省 大臣官房 秘書課 監査官 笠原 健

や事業者が工夫を重ねて、食品に様々な付加価値を付けるケースも増えていきます。選択肢が増えることは重要です。農水省としても消費者の色々な考え方に沿って、消費者目線で情報提供することが大切だと思います。

**石川** 自分の健康や食べることに無関心な人たちは、何かのきっかけで意識を変えたいという人はあると思います。近年は子どもたちへの食育も行われています。環境に優しい持続可能な農業や栄養機能が強化されている食品に関心を持つ消費者も増えてきているのではないのでしょうか。

**朝日** 食料の安定供給といつても様々な価値基準があります。とにかく栄養がとれればいいという人もいれば、もつとブランド価値のあるものがないという人もいます。安全・安心な食料を安定供給するという使命は最低

限保ちつつ、そういう幅広いニーズに対してどう答えるかが農水省としての課題です。

**加藤** 消費者は100円のキャベツを買う時であれば、300円を選ぶことが大事。こうして食の多様性が生まれると、消費者の知識や選択の基準がますます重要になります。僕も含めて消費者の食に対するリテラシーを高めることは大切ですね。

——農業従事者の減少や高齢化は消費者にとっても深刻な問題です。  
**ダイちゃん** 農業には肉体的にも相当ハードな仕事もある。自然相手でも天候にも左右される。一方で収入が高いかというと、キャベツを5000円では売れません。いいものを作ってもうからないとなると、農業という職業の選択肢は狭まってくる。作業の自動化を進めて、作業負担を減らしたいという声はよく聞きます。

**朝日** 一方で、ブランド野菜を育て、差別化を図るのに成功している農家もいます。ただ、日本は中山間地が多く耕作面積が狭く集約化・大規模化は依然大きな課題。離れた農家の農地を集積・集約し、それを若手や意欲ある担い手に引き継いでいく施策も進んでいる。

**河瀬** 私の知人の農家さんは、糖度が梨と同じ12度もある甘い白菜を作り、1玉1000円超えでもちゃんと売れるそうです。なぜその野菜がおいしいのか、それを可視化して、消費者に伝える努力は大切ですね。



農林水産省 消費・安全局 植物防疫課 生産安全専門官 石川 裕子

J-A 卸売市場等の流通網も大事です。安定供給のためのリスクヘッジ機能があり、これは生産者だけでなく消費者にとっても歓迎すべきことです。

**石川** 安価で品質が一定している野菜をスーパーで買えることにJ-Aが果たしている役割は大きい。中には特産品に力を入れて地域の生産者集団として質の高いものを供給できる体制づくりを進めているJ-Aもあります。

### 食の多様化の時代に自給率をどう捉えるか

——日本の食料の自給率についても

米をもっと食べようといわれても、それを自分の体が欲していないなければ、なかなか呼びかけにのびません。  
**加藤** 自給率を上げるために消費者としてどんなことをすればいいのでしょうか。



農林水産省 大臣官房 課長補佐 朝日 健介

**朝日** たしかに消費者がずっとお米やお芋ばかり食べている自給率は上がりますが、70年代以降に肉や油の消費量が増えるにつれて、餌や原料となるトウモロコシは輸入依存し、全体としては自給率が下がりました。では、米や芋をもっと食べればいかというと、必ずしもそうではない。

**加藤** 消費者もそれを求めているわけではないですよね。

**朝日** 日本は、気候や国土面積の条件があるので、どうしても一部は輸入に頼らざるを得ない。重要なのは、輸入も安定的に確保しながら国内の生産装置を守っていくことです。農村から人がなくなると、畑が畑でなくなる。田んぼが田んぼでなくなる事態だけは避けなければなりません。

**石川** 一方で、数値目標がカローリーの自給率だけでいいの、かというのとも思います。私たちはカロリーを摂取するだけでなく、野菜や果物からとれるビタミンなどいろいろな栄養が必要。消費者の意識はもと多様化しています。  
**加藤** 難しいですね。輸入といつても、日本の国のパワーが衰えれば輸入もできなくなりますが、小ロットだとそれは安くも入れられない。大きなロットだと安く小売をいれられていく。日本のGDPが大きいから輸入できているという面もある。

**笠原** 安定的な輸入は国としても重要視すべき。輸入先の多角化、相手国との関係をしっかりと作り、もしもの時にも輸入が確保できるようにすることが大切。そうした外交努力も不可欠な時代になっていると思います。

### 技術で変わる食の未来 安定供給は不変の使命

——20年後、30年後の日本の食の姿はどういうものが理想的でしょうか？

**加藤** とんでもなく変わるでしょう。近年は気候変動の影響、採れる地域もずいぶん変わってきている。品種改良で今まで日本では作れなかった野菜や果物も採れるようになるかもしれない。日本国内で食の多様化が

生まれ、国内で消費できない分は輸出へ。日本の農家は海外に比べてもい出を作る力があるし、世界に冠たる農業輸出国になつていければいいなと。そのために、今の生産・流通の基盤を変えて、若い人たちがどんどん参入できるようにしなければ。  
**河瀬** 消費者として食の情報もきちんと知る。自分の体にどんな栄養が必要か知らなければ、どうやって選んでいいかわからない。食に対して興味をもつ人たちが増えていくことで、農業への関心も生まれる。その一歩目を知ることだと思います。  
**ダイちゃん** 今から20年前はスマホなんてなかった。ITの進化はすさまじい。食も同じような進化を遂げるでしょう。効率的に栄養だけを摂れる食品と、反対に個人の選択肢や感性のこだわりを満たす食品と両極化するんじゃないかと思えます。食とは、五感で感じられるコミュニケーションのメディア。単にカロリーを満たすだけではない。豊かな感性をもつ人が増えるのが30年後の食の理想型です。

**笠原** 食をめぐると環境がどんなに変わっていても、我々農水省としては食料の安定供給をしていくことが最重要。そのために、輸入はもちろんだが国内農業は夢のある産業であるべきであり、現に販売金額5億円を超えている農家も着実に増えている。こうした明るい現状もぜひ皆さんに知ってほしい。

**朝日** 加藤さんがおっしゃったように、将来は日本で亜熱帯の作物がたくさん採れるようになるかもしれません。食の多様化は消費者や生産者にとっても、選択肢が増えるチャンスです。ただ、みかんをブラッドオレンジに替えようとしても、使える設備も育て方も違う。原産地とは全く違う害虫がつくかもわからない。変化に対応した形で消費者・生産者に正しい情報を伝えていきたいと思います。  
**石川** 変化対応しながら食の安定供給の仕組みを作るのが、農水省の大事な役割。まずは知ることが大事だと、河瀬さんもダイちゃんさんもおっしゃっていましたが、知ってもらうためのわかりやすい表示や伝え方をもう工夫しなければなりません。一人ひとりがおいしいと思えてご飯を食べられる環境をこれからも支え続けたいと思います。



写真下段：左から、ダイちゃん氏、河瀬氏、加藤氏、羽生氏（ファシリテーター） 写真上段：左から、朝日、石川、笠原

**食料・農業・農村基本法の検証と見直しの検討**

「食料・農業・農村基本法」は、様々な政策の方向性を定める指針となるものです。制定から20年を経て、農林水産省では、多くの皆さまからご意見を伺いながら、総合的な検証と見直しに向けた検討を進めています。

詳しくはこちら

**農林水産省「チーム2050」**

将来の農林水産省の政策を担う若手職員有志による「チーム2050」。今日的な社会課題や国内外の動向を踏まえ、未来（2050年）の農林水産省や施策のあり方について、「自分のこと」として検討に取り組んでいます。



チーム 2050

## 広告

食料・農業・農村基本法、検証中。

食から日本を考える。

農林水産省



# NIPPON FOOD SHIFT



イトヨーカ堂 ネット通販部 鈴木 陽介氏

**多様化、複雑化で市場予測は難しく**  
 — 日本の人口が減少していく中で今後の日本の食市場の行方と、グローバル市場への対応は？  
**鈴木** 以前は商品の仕入れ担当や店舗勤務などをしていました。その経験から言えるのは市場はますます複雑化しているということ。デイスカウトなどのを求める人が増える中で、高品質なものを求める消費者も増えていきます。しかもそれが固定化していません。普段、安価な食品を購入している人も、ハレの日には高品質・高品質なものを買います。かつては食の情報発信は企業からでしたが、今は個人SNS



国分グループ本社 低温フレッシュデリカ統括部 戦略推進室長 御供 講之氏

り遠くまで運ばれます。商圏をきめ細かく分析し、どういった世帯のどのような家族構成の人がお店に立ち寄るのか、そこまで踏み込んで商品の提案を行

## ニッポンの食 NEXT 座談会 ②

聞きたい 話したい 話し合いたい

**「おいしい」の、その前に。**  
**これからの「食」を どう考え、何をすべきか？**  
**事業者 × 農林水産省**  
 おいしいものが当たり前のように手に入り、豊かな食を享受できる今の日本。その当たり前は、今後ますますと続いていくのでしょうか。気候変動、世界情勢の変化など地球規模のものから、少子高齢化など国内問題まで、日本の「食」の裏側には解決すべき様々な課題があります。これからの「食」はどうか、そのために何をすべきか。「食料・農業・農村基本法」の見直しに向けた議論の環として、3日連続の紙面上で消費者、事業者、生産者の方々と農林水産省の若手職員有志による「チーム2050」の座談会を展開します。思いや意見を交わしながら、20年後、30年後の日本の「食」を考え、あるべき姿を追求します。



農林水産省 大臣官房 米のり食料システム戦略グループ 課長補佐 伊藤 圭

のインフルエンサーのような人たちの発信力が無視できません。彼らが「三言二語」するだけで爆発的な売り上げになる例もあります。

**御供** 当社は卸売業ですが、単にメーカーが製造したものを仕入れて、小売りや外食産業に販売するだけでは競争力を保てなくなっています。そのため、生活者トレンドの変化を先取りすることに力を入れています。今後、消費の中心はZ世代に移るの確実。その需要を今から予測するわけです。近年は、マーケットが多様化し、売れるものがエリアによってかなり

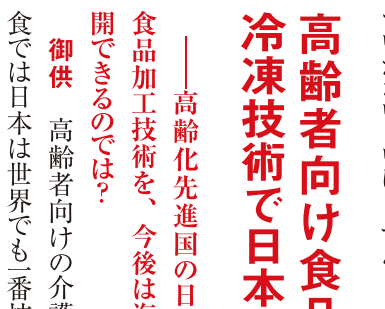
うようになってきています。  
**山崎** 私は資材調達部なのでいろいろなもの海外から買っていますが、年々確保するのが大変です。乳製品は例で言うと、かつて東南アジアや中国は生乳を粉にした全脂粉乳の輸入が大半でしたが、経済成長や人口増とともに、発酵乳、チーズといった加工製品の需要が高まっています。欧州やオーストラリアのモzzarellaチーズが中国などに輸出され、日本は必要ない乳製品を確保するためにそういう国々とも競争しなければならぬのです。一方で、日本の食品の製造技術や品質は海外からも高く評価されています。機能性表示食品や特定保健用食品（トクホ）のノウハウもあります。今後はそれを海外に展開していければと思います。

**福島** Z世代はSDG、特に環境というキーワードには強い関心をもっていますね。チーム2050でも未来の食をどうしていくかは重要なテーマで、特に私はフードテックをどう振興していくかを考えているのですが、代替肉や昆虫食なども、環境負荷が低いとわかれれば、若い世代は積極的に消費するようになるものではないでしょうか。

**伊藤** 若い世代におけるSDG意識の高まりは感じます。ただ、環境にやさしいといっても、やはりおいしくなければいけないし、自分の健康増進につながるものでなければ、彼らも手には取らないでしょうね。

山崎 「データがあるのでこの新商品は売れます」と言われても、なかなか思うようにいかない。まだ、伝統的なマーケティングと商品開発の方が

**山崎** 予測は無理かどうかわかりませんが、少なくとも現状ではできていない。情報の伝達スピードが昔とは全然違いますし、突発的、かつ切り替わりも早いブームへの対応はとても難しい。  
**鈴木** 例えば何が流行したからといって準備をしても、準備が整ったときにはブームが終わっている、ということもある。



農林水産省 大臣官房 企画第1係 落合 真衣

**山崎** 輸出については2025年に2兆円、2030年に5兆円という目標を掲げられていますが、農産物だけでなく加工品輸出にも大きな期待をしています。ロットが安定的に供給できないことにはだるさを感じ、今持っている分だけを出して、それに見合った価格で売れない。実際、海外では乳製品のオークション市場が発達し、相場がたえず変動。そこに日本も乗ればいいと思います。これまで日本の乳製品取引は安定しており、オークションで取引されることはありませんでした。物価の感覚も違うし、食品規格も異なる。例えば国内の脱脂粉乳ではたんぱく質に明確な基準はありませんが、海外だと必ずチカラクされる。こうした商習慣の違いを理解し、海外との商売感覚を身につけていかないとダメですね。

**高年齢者向け食品や冷凍技術で日本は優位**  
 — 高年齢先進国の日本で培った食品加工技術を、今後は海外にも展開できるのでは？  
**御供** 高齢者向けの介護食や治療食では日本は世界でも番技術力があります。当社もメーカーと協力してその技術を培ってきました。今後、日本国内だけでなく、中国・韓国などでも高年齢化が進んでいきますから、日本の技術を世界に広めていくことは効果的だと思います。  
**鈴木** 冷凍食品でも日本は先進的な技術を持っていますよね。  
**御供** 冷凍技術はほとんど進化してきて、今は牛乳や生クリーム、ヨーグルトを冷凍できる技術が出てきました。それによって食品の賞味期限が延び、廃棄ロスも削減。日本が誇る冷凍技術をもつてすれば、これまで鮮

勝が目があるように思います。  
**伊藤** 各社が共通の課題を抱えている場合は、企業同士の連携による解決を図ることも重要です。最近も物流コストの削減などを背景に、コンビニ大手が協調し、荷物を混載して共同配送する試みもされています。  
**落合** 国内のニーズは多様化して、個々の対応が難しくなっていますが、グローバル市場も輸出促進に力を入れています。ただ、海外市場が求めるロットに対応できないので、商機を失っているという話を聞くこともあります。

度の維持が難しかった水産物なども輸出することができそうです。  
**福島** 魚を獲れたてのフレッシュな状態のまま海外に持っていくのは本当にすごい。

**伊藤** 超高齢社会になっていくと、食品のアクセスの問題が今後顕在化していきます。そのため、過疎地におけるドローン配送など新しい技術が盛んに実験されています。課題先進国としての日本における技術やイノベーションが加速すれば、いずれ他の国がそれを追従し、日本の食品製造・物流のテクノロジーは国内の消費者をより便利にするだけでなく、外貨を稼ぐ武器にもなると思います。



雪印メグミルク 資材調達部 副部長 山崎 竜氏

**山崎** 農林水産省、工業、商業を組み合わせる6次産業化で生産物の価値を向上させることも課題ですね。ただ、1次産業者は資本がなくて、初期の設備投資だけでは事業が回らない。それを踏まえて、農水省に限らず他の省庁も連携して、持続可能なプログラムを組んでほしいと思います。

**伊藤** 農業・食品産業におけるカーボンフットプリントへの対応も重要です。食料システム全体にわたって環境負荷をいかに抑えるか。官民連携の動きは欧米でも活発、日本ももっとやってみなければなりません。環境対策は付加的なコストと捉えられがちですが、その対策を通して商品に新しい価値が生まれるという流れを作っていくことが必要です。

**落合** 日本の食品価格は諸外国に比べると安いですが、こんなに安く、農家さんはやっつけの心配になることもあります。なぜ適正価格で取引がされないのか。売り場に行っても、生産者や食品事業者の顔が見えない、その工夫や企業努力がまだまだ伝わっていません。「安心」だけが購入の決め手とならないよう、消費者まで価値を上げる取り組みが必要です。

**福島** みんなのお話を伺いながら、そもそも自分はなぜ農水省で働こうと思ったのかを思い出していました。食は人の命の根源。食べて楽しい気分をわかち合ひ、人生を豊かにするものだからこそそれを支えたいと思ったんです。日本は食生活が豊かに幸せを求める価値観が強い国。30年後もずっとそうありたい。もちろん、これから先も様々なリスクがありますが、これをつひつと潰しながら、食料の安定供給を支え続けたい。今日はその思いを新たにすることができました。

**伊藤** 超高齢社会になっていくと、食品のアクセスの問題が今後顕在化していきます。そのため、過疎地におけるドローン配送など新しい技術が盛んに実験されています。課題先進国としての日本における技術やイノベーションが加速すれば、いずれ他の国がそれを追従し、日本の食品製造・物流のテクノロジーは国内の消費者をより便利にするだけでなく、外貨を稼ぐ武器にもなると思います。

**福島** 魚を獲れたてのフレッシュな状態のまま海外に持っていくのは本当にすごい。

**伊藤** 超高齢社会になっていくと、食品のアクセスの問題が今後顕在化していきます。そのため、過疎地におけるドローン配送など新しい技術が盛んに実験されています。課題先進国としての日本における技術やイノベーションが加速すれば、いずれ他の国がそれを追従し、日本の食品製造・物流のテクノロジーは国内の消費者をより便利にするだけでなく、外貨を稼ぐ武器にもなると思います。



写真下段：左から、山崎氏、御供氏、羽生氏、鈴木氏 写真上段：左から、福島、伊藤、落合

**食料・農業・農村基本法の検証と見直しの検討**  
 「食料・農業・農村基本法」は、様々な政策の方向性を定める指針となるものです。制定から20年を経て、農林水産省では、多くの皆さまからご意見を伺いながら、総合的な検証と見直しに向けた検討を進めています。

**農林水産省「チーム2050」**  
 将来の農林水産省の政策を担う若手職員有志による「チーム2050」。今日的な社会課題や国内外の動向を踏まえ、未来（2050年）の農林水産省のあり方について、「自分ごと」として検討に取り組んでいます。



【ファシリテーター】 著作家 羽生 祥子氏

**福島** みんなのお話を伺いながら、そもそも自分はなぜ農水省で働こうと思ったのかを思い出していました。食は人の命の根源。食べて楽しい気分をわかち合ひ、人生を豊かにするものだからこそそれを支えたいと思ったんです。日本は食生活が豊かに幸せを求める価値観が強い国。30年後もずっとそうありたい。もちろん、これから先も様々なリスクがありますが、これをつひつと潰しながら、食料の安定供給を支え続けたい。今日はその思いを新たにすることができました。



チーム2050

広告

食料・農業・農村基本法、検証中。

食から日本を考える。

農林水産省



# NIPPON FOOD SHIFT

「おいしい」の、その前に。  
これからの「食」を  
どう考え、何をするべきか？  
生産者 × 農林水産省

おいしいものが当たり前のように入り、豊かな食を享受できる今の日本。その当たり前は、今後ますますと続いていくのでしょうか。気候変動、世界情勢の変化など地球規模のものから、少子高齢化など国内問題まで、日本の「食」の裏側には解決すべき様々な課題があります。これからの「食」はどうか、そのために何をすべきか。「食料・農業・農村基本法」の見直しに向けた議論の環として、3日連続の紙面上で消費者、事業者、生産者の方々と農林水産省の若手職員有志による「チーム2050」の座談会を展開します。思いや意見を交わしながら、20年後、30年後の日本の「食」を考え、あるべき姿を追求します。

## 食を支えるのは生産者だけではない

まずはみなさんと農業の関わりについて聞かせてください。  
**飯野** 埼玉県川越市でカブ、サトイモ、ニンジン、それに川越名産のサツマイモを作っています。5年前に全国農協青年組織協議会の会長を務め、日本の農業をどのように持続可能なものにしていくかを仲間たちと熱心に議論し、この問題の解決が私のライフワークにもなっています。

**佐藤** 学生時代に中越地震復興支援のボランティアとして新潟の十日町市に入り、それが縁でこの地で就農しました。「里山農業を心づく世界」をモットーに新しい形の生産組合を作っており、サツマイモを栽培から加工・販売までしています。同時に、農村女性の自立支援にも取り組んでいます。  
**窪田** 鹿児島農業大学校で知り合った夫と一緒に、霧島市で黒毛和牛の繁殖と肥育を営んでいます。鹿児島黒牛の魅力発信、消費拡大のために畜産を営む女性たちのコミュニティ活動にも関わっています。近年はトウモロコシなどの飼料が倍近く値上がりして、経営は厳しいですが頑張っています。

日本は食料輸入大国。全てを国産でまかなうのは現実的でない中、今後、国産農畜産物をどのようにしていきたいですか。



飯野 農園 飯野 芳彦氏

**飯野** 食料自給率ということですが、例えば大豆は93%を輸入に頼っています。味噌や醤油の原材料としてだけでなく、輸入大豆のほとんどが食用油として、多くの食品やお菓子に使用されています。もし、輸入が途絶えれば多くの食品がスーパーの棚から消えることになってしまいます。

もちろん現在はスーパーやレストランに行けばおいしいものが食べられますし、たとえ大災害があっても流通が止まっても3日と経たずにスーパーに食品が並びます。この素晴らしいシステムを今後維持していくためにはどうしたらいいのか。我々農業者だけでなく、消費者の方々、また事業者の方々も含めて一緒に考えていかなければと思います。

**窪田** 国産牛は輸入牛に比べて高いとよく聞かれますが、外国産や輸入牛でも飼育期間の半分より長く国内で飼育すれば国産牛と呼ばれます。これは消費者にはあまり知られていないことです。国産牛のなかでも私が生産している黒毛和牛は高級品。なぜ高いかというと、お肉になるまで3年もかかるからです。そうした農業の現実を知ってほしくて、私たちのチー

ムは地元の子どもたちを集めて話をしています。消費者とのダイレクトな接点、率直なコミュニケーションの場はこれからも増やしていきたいです。  
後継者を育成する「航海図」が必要

農業の後継者不足も深刻。自営農業者は年間5万人ずつ減少している中で新規就農者を確保するためには？

**佐藤** 農業はこれまで家族経営が中心。一般企業のように上司が部下を育てる経験がなく、学びの機会や自己成長の機会も限られていました。さらに農産物の販売を外部に任せたいと、経営者というよりただモノを作るだけの労働者という意識に。後継者育成には、その子が何者として、どうやってどこに向かうのか「航海図」を作る機会が必要。その上で経営を数字で語り、かつ厳しい自然環境の農業に「楽しい」現場とチームを作る力を身につけることが鍵。私たちもその歩として農家の女性と経営者も重ねています。



ウーマンファーマーズジャパン 代表取締役 佐藤 可奈子氏

**飯野** 農業が社会的にきちんと認められるためには、経営者感覚をもった農業者が増えることが欠かせない。

## ニッポンの食 NEXT 座談会 ③

聞きたい  
話したい  
話し合いたい

農業法人化も一つの道ですが、私は小規模個人事業主です。法人並みに労働環境を整えることで従業員やパートさんが笑顔で仕事ができるようにしています。農業は自然相手です。子期しないこともあり、農業は食べ物に困らないし、自然と触れあう環境は子育てには最適。人それぞれ感覚ですが、幸せを感じる職業だと思っています。幸せな農業者が地域に根ざしながら暮らしていくことが重要だと思います。

それが持続可能性につながると思っています。  
**佐藤** 農産物は毎年同じ品質のもの、同じクオリティのものができるには限りません。どうしても品質にゆらぎが出るし、それが価格にも反映されてしまいます。けれども、このゆらぎがあるからこそ、消費者と共有できた理想。例えばワインの世界には毎年の葡萄の出来の差を楽しむ文化があります。ゆらぎを受け止めて、農業現場への想像力も磨くことができれば、私たち生産者の未来もまだまだ明るいと思います。



水産庁 増殖推進部 栽培課 課長補佐 横山 健太郎

必要があります。一口に農業者といっても、農作業そのものをする人なのか、ブレンとして企画・戦略や販路開拓を担う人なのか、あるいは農業の業務改善に取り組む人なのか、様々な働き方があると思います。必ずしも農村に住まなくても都会でリモートでつながりながら経営に関わることもできるはずなんです。

一方、若者だけでなく、多様なキャリアやスキルをもつ高齢者にも目を向けるべきです。当然、元気な女性もターゲットです。日本の農業が発展していくためには何が足りないのか、こんな経験やスキルをもつ人が欲しいと具体的にアピールしていけば、農村に限らず都会にいる人も含めて、若い人たちだけでなく上の世代も含め、様々な人材リソースを活用しているのではないかと思います。

## 本質への共通理解 求められるICT化

サステナブルな農業経営のために、農業者はどう意識改革をすべきか、また消費者に求めていることは？

**飯野** 日本のスーパーでは、海外では考えられないくらいハイクオリティな農産物が格安で売られています。農家はそのためにかんがりのコストと手間を負担している。本音で言えばもっと高く買ってほしいけれど、私も消費者の人なので、値上げは心苦しい。ただ、今後の農業の持続可能性を考えた時、消費者と生産者の歩み寄りが必要だと思っています。例えば私が生産しているカブの場合、目立たない収穫の時にいた傷などがあると見た目だけの問題で秀品から等級を下げ、2割程度安く取り引きされます。この商品に秀品扱いしていただければ私たちの手取りも増えます。もちろん虫食いや病気のものは論外です。また、新規就農者も、手取りが増えれば定着率が上がる可能性があり、

それが持続可能性につながると思っています。  
**窪田** サステナブルな農業経営のためには、なんらかのICT化は必須。私の畜舎でもICTツールを活用して、牛の個体管理や発情の早期発見などをしています。AIカメラで牛の羊水の状態を把握することで、分娩事故も少なくなります。これらを牧場の誰もスマートフォンで管理できる。そうすることで、私たちの労働負担もすいぶん軽減されるようになっていきました。



窪田 加奈子氏

**早瀬** 本日お三方のお話を聞いて、改めて食・農業の本質的な部分に触れることができ、思いを新たにしました。今後の農業や食品産業を考えるには、生産者、消費者、流通事業者、研究者、行政など食に関わる全ての方が、こうした食・農業の本質的な理解を互いに深めていくことが重要であり、いづれかが欠けてもこれを担保することは困難だと感じました。また、ICTのお話から、こうしたブレイカーの可能性を大きく広げるのであろう「技術」の役割も今後重要になってくると感じました。

食・農業に関わる全ての人の想いが、より良い社会を作り、社会を支える食品産業、農業が育まれます。将来における食の安定供給に向けて、様々な人と人の繋がりを、技術の社会実装を意識した取り組みを進めていきたいと思います。



農林水産省 畜産局 同組織課 経済班 課長補佐 早瀬 健彦

**堀田** 国内では少子高齢化が進み、働く女性や高齢者が今より増え、

ライフスタイルの変化に合わせて食生活もさらに多様化、簡便化が要求されていきます。食品産業では加工技術も進化していきます。そうすると、今以上に質・量ともに多様な加工食品のニーズがあった農畜産物が求められていく。一方、国外では食料の獲得競争が激化していくと考えられるので、ニーズの変化に国内でもしっかりと対応していく必要があります。需要の変化に対応するには、採算性を確保できる農業を営むには、農業者の経営感覚を今以上に高めていく必要があります。今日お話を伺ったお三方のように、作る力、経営力、販売力を併せ持つ農業者やIAがもっと増えていくような環境づくりをしていきたい。そのためにお話にあった消費者と農業現場の橋渡しというののも一つかなと思いました。



農林水産省 畜産局 牛乳乳製品課 生乳班 畜産専門官 堀田 知恵子

**横山** 世間では農業は3Kのイメージがありますが、自然環境のゆらぎがある中でも、適切に判断しながら農作物を管理し、かつ労働力が減る中でも、なんとか経営努力を続けていくという意味で、実は強靱な超先進産業なのではないかと思っています。レストランで高級な和牛を楽しんで



チーム2050

だり、地元の特産品もネットで手に入りやすくなったりしました。こうした当たり前は本当はすごいこと。それを私たちが発信して、国民的な理解を深めていくことが重要だと思っています。今後、農業のやり方や食卓への届け方が大きく変わっていくと思います。今日のお三方のような、先を見据え変化に対応できる経営者や自分の農畜産物の魅力を語れる経営者をもっと増やしていきたいと思っています。『当たり前』と思われている食を、これからも国民に提供できるように、農業経営者を後押しするとともに、『当たり前』のすこさをしつかり発信していきます。



写真左から、羽生氏(ファシリテーター)、飯野氏、横山、佐藤氏、早瀬、窪田氏、堀田

### 食料・農業・農村基本法の検証と見直しの検討

「食料・農業・農村基本法」は、様々な政策の方向性を定める指針となるものです。制定から20年を経て、農林水産省では、多くの皆さまからご意見を伺いながら、総合的な検証と見直しに向けた検討を進めています。

詳しくはこちら



### 農林水産省「チーム2050」

将来の農林水産省の政策を担う若手職員有志による「チーム2050」。今日的な社会課題や国内外の動向を踏まえ、未来(2050年)の農林水産省や施策のあり方について、「自分のこと」として検討に取り組んでいます。

広告

食料・農業・農村基本法、検証中。

食から日本を考える。

農林水産省